46回　夏期学校主要プログラム

＊開会挨拶・久保田暁一氏
＊開会礼拝・尾藤　章氏
＊主題講演・池田勇人氏
＊講演・1・玉木　功氏
＊講演・2・今関信子氏
＊みんなで歌おう・田丸千晶氏
＊早天礼拝・川上与志夫氏
＊講演・3・大田正紀氏
＊グループ交流協議
＊ＪＣＰ総会・進行　浅見鶴蔵氏
＊閉会礼拝・奥村直彦氏
＊閉会挨拶・三浦喜代子氏
＊総合司会進行長原武夫氏

今回の夏期学校は久保田暁一先生を中心に、ＪＣＰ関西ブロックが主催しました。なお、写真はすべて長原兄の提供です。

開会礼拝『今日、一日のあり方』
尾藤　章　近江八幡教会牧師

ダーク・ダックスの歌に、「一週間」というのがありますが、そこで歌われているゆっくりした一週間は、定年退職後の「解放された自我に目覚めた」人生に通じるものがあります。現代社会のシンボルでもあるスピード化について、もう一度よく考える必要があるのではないでしょうか。

世界で一番ゆっくりした時間の単位に劫というのがあります。大劫と言えば、一二〇里四方の城壁の中にからし種をいっぱい入れて三年に一度一粒ずつ取り出してなくなる時間と言われます。この劫の話は、心の深呼吸をさせてくれる思いがします。今日一日が私自身の一日であるという主体的な一日をとらえ、生き方を決断することができるのです。マタイ・六・二五～三四には、「思い悩むな」というお言葉が一貫して流れています。思い悩むということは、心が幾つにも割れることを意味します。ゆったりした心で物事を見る時、真実なものが見え主イエスに信じ従っている私たちのあり方に具現するものです。

（まとめ　駒田隆）

講演　ＪＣＰ副理事長玉木功
神に生かされた讃美歌作家

一、日本人のクリスマス讃美歌

日本人の作詞・作曲のものがある。讃美歌1の97と1の119。この2曲の作詞は三輪源造で、同志社女子専門の教授。彼の詩の特徴は温かみがあり、清楚な感じがする。

二、讃美の人、祈りの人、鳥居忠五郎

この曲の作曲家、鳥居忠五郎は、『生かされた八十路』と題して非売品で出版した。私は東京学芸大学時代に鳥居先生と接点をもっている。この本の寄贈をうけた。先生は合唱指揮者、作曲家、讃美歌編纂委員、合唱コンクールの審査員、オルガン・ピアノ奏者、独唱家である。明治学院神学部卒業後、現在の東京芸術大学声楽科に学ぶ。青山師範学校教授を経て東京学芸大学教授となる。人柄のやさしい先生で学生を大切にする人だった。小学六年から明治学院中学四年まで東京の親戚の家で生活した。そこは地獄だった。その家の主婦は彼の勉強など全く考えずに、下男とした。朝夕の食事の準備、後片付けにこき使われた。だが忠五郎は両親には一言も伝えなかった。難病の妹がいたので、両親の苦労を痛いほどわかっていた。彼を支えたのは、教会生活である。説教を聞き、讃美歌を歌うことは、慰めであり、生きる力となった。

三、讃美歌の中に入り込む

やがて忠五郎の生活の実態が両親に何時しか届いた。明治学院のヘボン宿舎に移ることができ、毎食お腹いっぱい食事ができた。彼は彼を支え、癒してくれた教会音楽に夢中になった。東京学芸大学で声楽を教え、合唱の指揮に専念した。

この曲は一九四〇年に「青年讃美歌」が編纂される時、彼に作曲が依頼された。

羊は眠れり草の床に
冴えゆく冬の夜　霜も見えつ
はるかにひびくは　風か、水か、
いなとよ、みつかい、うたうみうた

講演　今関信子氏
わたしの創作方法

演題にそって語るべきものを、私は持ち合わせていない。言えることは、「その時、その場で、その営みの中で、力一杯書いていく」、ただそれだけだ。

私は、若くして受洗し、礼拝に出席し、この世への「派遣」を意識することはある。

書くことは好きだった。だから、場が与えられると、何でも書いた。科学読み物だろうが、伝説の再話だろうが、エッセイだろうが、ジャンルもグレードも選ばなかった。原稿が没になることもあった。私は諦めなかった。書き直す。それでもだめなら、稿を改める。構成し直したり、人称を変えてみたり、文体を変えてみたりした。私は文学的素養のない人間だ。だから、書いた。書きながら学んだ。経験が学ばせてくれたのだろう。

そのような方法で書く私の作品は、力みすぎだと言われることがある。エネルギーがあると誉められることもある。それもこれも、私にはどうすることもできない。だから、それが作品の香りとなるよう祈るばかりだ。

一冊目の本が出てから、三十三年が経った。よく続けられたと思う。そして、自分を越えて働く不思議な力に感動している。

私は仕事を選ばない。だから、思いも及ばないことに出会うかもしれない。拓かれてくる世界で、私は書く。もっとよく物事を感じ取り、表現できるようになったら、どんなにいいだろうと、つまらない欲求も合わせ持ちながら。

私は、これからも書き続けるだろう。その時を、その場にあって。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

講演　大田正紀氏
志に生きる―自分の手で働く

パウロは、終わりの日までの手の業に励みなさいと勧めています。横浜税関長の長男有島武郎は、バイリンガルの保育所・ブリテン学校（現横浜英和学院）で育ち、学習院を経て札幌農学校に進学し、新渡戸稲造からクエーカーの愛の実践を学び、内村鑑三によって罪を自覚し、札幌独立教会員となりました。

ところが、アメリカ留学中に信仰を喪失し、教会を離れます。社会的弱者の救済をもくろみ、「働かない者は食べてはいけない」と百万坪の狩太農場を小作人に開放し、文筆活動に専念しました。そんな有島が、人妻と心中したため、内村鑑三は、信仰の喪失が大きな虚無を生んだのだ、と糾弾しました。

一ヶ月後、背徳の芸術と文化の都・東京は、関東大震災で壊滅。「天譴」と内村は受け止めました。

三浦光世は、三浦綾子の夫君で、クリスチャン歌人の第一人者です。短歌を読むと、三浦綾子文芸に大きな影響を与えたことがわかります。青年光世が病床の綾子を見舞った後、ひたすら祈りました。

わたしのいのちとひきかえてもけっこうですから癒してください、と。

一時間も祈り続けたとき「愛するか」というかすかな声を聞いたのです。

四年後、十三年に及ぶ闘病生活から奇跡的に癒された綾子と結婚します。人生のすべてを聖書の教えに聞く姿勢を保ち続けました。

死ぬる日も同時に来るような予感して
聖堂に結婚の誓ひ交わしいつ

この弱き妻が子を背負ふだに憐れにて
子を願ふこころになれず

地上の生涯を信仰の証としての文章を書く。それが二人の志でした。

早天礼拝　川上与志夫氏
幸せの「居場所」づくり

人の幸せは、人間関係で決定される。その人間関係の糸が織られて「居場所」が形成される。社会における「私」の「居場所」には、複数の人が存在する。

　人という文字は、左右が同じ大きさであることをまず認識したい。左に流れる筆は上が太く下が細い。右に流れるのは、その逆である。人はだれも、その価値と尊厳は同じであるが、個々人は違った能力や性格をもって支え合う。これがこの文字の意味である。

　人間関係の織り成す「居場所」には、３つの階段がある。

　１つ目は、「居場所さがし」。学校、会社、結婚など、人は幸せの「居場所」を求めて右往左往する。ところがどの居場所も、居心地がいいとは限らない。ときには針のむしろ。我慢を続け、ストレスに落ち込む。あるいは、転校・転職・再婚のわなにはまる。どこに越しても住みにくいと悟ったとき、

　２つ目の階段にのぼる。「居場所づくり」がそれである。幸の居場所は自分でつくるもの。それには忍耐と努力と希望が必要。その背景に「思いやる心」と「生かされていることへの感謝」があれば申し分ない。「居場所」は明るく、楽しいものになる。

　３つ目の階段は、幸せを発信する「居場所いかし」である。与えられた幸せをどう活かしたらよいのか。人生が楽しいのは、役に立つ創造に挑めるから。ここに人生の意味が躍動する。

　さあ今日も、笑顔で挑戦しよう。

　感謝しながら、楽しく、夢に向かって…。

閉会礼拝・奥村直彦安土教会牧師
知恵と知識との宝はすべて

　先ずキリスト教と文学について、触れられ、特にコロサイの信徒への手紙Ⅱ一・五～三節―智恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠されている―御言葉を示されました。

　特にキリスト者として詩を書いた別所梅之助氏による讃美歌二七八番より

三節「この世の知識は　天より洩れくる光をうつせど　明るさ足（たら）わず」

四節「知りえぬ真理も　御旨とかしこみ漏れくる光を　明（さや）かに仰ぎみん」

五節「知識も進みて　敬虔（つつしみ）ふかかれ　こころの緒琴の　調べも高かれ」

　この讃美歌が聖書の御言葉にいかに忠実であるか感銘を与えられました。

　また、今年は来日百年でもある。日本と日本人を愛し、困難を克服して近江に「神の国」の理想社会をと生涯を捧げたウイリアム・メレル・ヴォーリズの作詞讃美歌二三六番（別所梅之助訳詞）をも紹介なされ、神の霊感に触れて人の心を新たにさせるものと結ばれました。

（まとめ　西山純子）

グループ交流協議の様子

◎児童文学グループ

　これから書きたい人、すでに出版した人、具体的なテーマを持っている人など、思いを分かち合いながら次のような視点を与えられました。

①テーマを持つこととその吟味。明確なテーマがないと、訴える力にならない。日常生活の中で起こる出来事がどうテーマにつながっていくか、生きる姿勢が問われている。

②子どもへの関心。自分の内なる子どもを育てる。日本にもトム・ソーヤを。

③事実を物語化していく技術。どこにでもある出来事に何をプラスして文学にしていくか。

　目に見えないものを見えるようにするのが児童文学、さらに生き方の問題という今関先生のご指導に、一同深くうなずきました。

（まとめ　槇　尚子）

◎創作・エッセイグループ

はじめに、三浦、小川、長谷川が発題者として、それぞれの今日までの「あかし文章活動」を話しました。参加者には「これから書きたいこと」を中心に各人の志を伺いました。

「罪深いところに神が対面してくださることを書きたい」「クリスチャン政治家の生涯を書きたい」「新聞にエッセイを投稿しているが、あかし文章は通用しない。苦戦している」「社会の弱者を書きたい」「児童文学を書いてきたが今、書けなくなり逃げている」「ひとりで書いてきたが、友がいない」助言者の久保田先生から「手を付けられない時、恐れてはならない。固執するのは傲慢である。なにを書こうか、さらに「愛」をどのようにするか、突き詰めていくことが大事。伝えたいことをドンドン書いていくことです」とアドバイスをいただきました。

（まとめ　長谷川和子）

◎詩歌グループ

参加者８名、大田、池田師を助言者、司会は西山姉。最初に駒田が谷川俊太郎の「ことばあそび」の後書き、詩と言葉についてのエッセーを朗読し、意見を求めた。参加者からは一つのことばでも大きな世界が表現されこと、また、神の存在が与える影響についても語り合った。参加者の作品も朗読され、言葉を通してそれぞれの思いが表されることを知った。（まとめ　駒田　隆）

◎文書伝道グループ

「解説でなくシーンを」

参加者は１２名。自己紹介の時に「文書伝道はＪＣＰのメインだ。エッセイも創作も結局はあかしの文書伝道だ」と力強い発言があってグループは勇気づけられた。キリスト教にはじめての人の心に届く文章を書きたい、それが参加者の願いだ。

助言者の玉木先生は「解説ではなくシーンを、情景を描く」と発言されて、私たち一同は感動した。これは易しいようでむつかしい。クリスチャン一人一人の神の愛の証しのドラマの花が、あちこちに咲けばすばらしい。九月の声を聞く今も、私はこの言葉を心に温めている。

（まとめ　松本瑞江）

✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤

感謝の報告

―夏期学校を終えて―

関西ブロック理事　久保田暁一氏

近江八幡市のウエルサンピア滋賀を会場にし、七月二十七日から二十八日にかけて開催された、関西ブロック担当による第四十六回日本クリスチャン・ペンクラブ（ＪＣＰ）の夏期学校が、一応無事に、充実裡に終了し、正直なところホッとしています。

何事にせよ、一つの企画行事を成功裡に成し遂げるには、それ相応の準備が必要です。私たち関西ブロックの者は、三月二十四日に第一回準備実行委員会を現地で立ち上げて、取り組む体制と分担を決め、以後、各分担で準備を進めると共に、更に六月十六日と七月十五日にも現地で委員会を開催してきました。

四月と六月の定例研究会では成功できるよう皆で祈りました。そして、当日を迎えたのですが、遠路の各地から五十余名の参加者も得て、充実した研修会が展開されたことを感謝しています。夏期学校の終了前に書いて貰った感想文には、良き学びをすることができたと書いて下さった方が非常に多くありましたし、また、私宛に寄せられたお葉書・手紙には、多く労をねぎらってくださっていました。

私は、それを率直に喜んでいます。

運営上、行き届かない点が多々あったことでしょうが、成功したのは、何といっても、参加者皆さんの学ぶ熱意と協力姿勢のお陰です。更に、講演や歌唱指導をしてくださった先生方には殆ど謝礼ができないのに、労を惜しまず周到な準備をしてくださいました。また、準備委員や各リーダーの方々のお働きにも感謝しています。人の和と連帯の大切さを改めて深く感じさせられた夏期学校でもありました。

ＪＣＰの発展を祈りつつ、ご報告とします。

夏期学校に参加して

参加者から、多くの感想をいただきました。紙面の都合で一部割愛しました。氏名は初参加の皆様のみ記しました。ご了解下さい。

◆どの先生からも心にしみる多くのことを学ばせていただきました。中身が濃すぎてこれから整理していきます。今は大変なことを聞いてしまったぞ、という重圧がすごいです。「たましいの底より涼し　きのふけふ」　関西　小島みどり

◆文章の書き方などということでなく、信仰的に多くの指針をいただき、クリスチャンとしての使命を改めて感じました。私のテーマが固まってきたことがおどろきです。　関西　奥野カネコ

◆分科会は時間が短かったですが、久保田先生やリーダーの適切なアドバイスが参考になりました。これから書こうとしている私はどのこともすべて吸収し、ヒントになることが多かったです。関西　中島香代

◆多くの方々の個性にふれ、神さまがひとりひとりをとても丁寧に造られたことを思わされました。先生方からいただいた「言葉の種」を子どもの心の内に蒔けたら・・・と願う思いが今心の中に与えられました。　関西　上地嘉子

◆大津の会にも数回しか参加していませんが、これを機会に積極的に参加したいと思わされました。各先生方のメッセージをこれからの姿勢に生かしていただけることと思い、参加の喜びとなりました。　関西　村田晴美

◆準備の行き届いた会で感謝します。夕べの歌唱指導もよかったです。分科会の会場は小さな控え室に分かれてそれぞれが寸前に作品を持ち寄ることができれば、もっと実りあるものになったと思います。超教派の集会がこんなにごやかに運営されたことに驚きです。今関先生のユーモアと信仰の根っ子が聖書と教会生活にある話が一番印象的でした。　関西　大田正紀

◆多くの方々とお知り合いになれて感謝です。おせわになった方々のご労苦に感謝申し上げます。　鳥取　山田忠義

◆分団で久保田先生が「書けないというのは傲慢である」と言ってくださったのには、カミナリに打たれたようなショックを受けました。この場に来ていることこそ「書きたい」という意思があるからだと気づきました。書くことのつらさを味わいながら、人に伝え、喜びとしていきたいと思います。　関西　八木ふよう

◆今回初めて参加し、会の目的や役員、会員の生きた証なども聞かせていただくことができ大変感謝です。参加できた喜びを広く伝え、クリスチャン・ペンクラブのこのような集いに、体力の続く限り参加したいと思っています。一歩一歩証の文章やエッセーなど書いていきたいと思います。　関西　小林桂子

◆主題講演を含む各講演に早速書き物をしたいというトリガー(刺激)を頂きました。その気持ちの高まりの中で一気に課題に取り組みたいと思います。また、共に学ぶ友が多く与えられ、励ましを受けました。ペン・クラブが全国的に拡げられますように祈っています。

◆児童文学についてご指導下さった今関先生、ありがとうございます。書きたいと思う芽が少し大きくなりました。

◆グループ交流について、もう少し長い時間で十分話し合いをしたいものです。それが一番生きた勉強になると思います。

◆何よりも大きな収穫は、各先生から頂いたメッセージです。今後の自分への励ましになり、同時に社員教育にも使わせて頂きたい教えもありました。

◆大田先生の講演は有島武郎、三浦綾子・光世という一見あまりつながりがなさそうな人物を取り上げ、ペンを持って学ぼうとする人たちに考えていくべき貴重なテーマを提供してくれました。

◆文章は見えないものを見えるようにと学び、元気が与えられました。早天礼拝で川上先生からの、居場所は「探し・作り・生かすこと」と教えられ、ありがとうございました。

◆プログラムを見た時は体力が持つだろうかと心配でしたが、お話を聞くたびに心が熱くなり真剣に聞き入ってしまいました。あかし文章を書くのは「伝えたいものがあるかどうか」ということ、「キリストにつながっている」ということにかかっていることを教えられま

した。

◆音楽・讃美の時があってとてもよかったと思いますが、各プログラムの間に短くてもみんなで讃美することがあってもよいと思いました。また、これを深めていく時がもてればもっといいなと感じますが、これは各ブロックですることかとも思います。プログラム終了後に自由参加のオプションがあるのもいいものだと思いました。

◆「来てよかった！」入会して以来、初めて「行ってみようかな」との想いを起こしてくださった神様に感謝します。今日より心新たに励みます。私は自分の証しを日本クリスチャン・ペンクラブからトラクトを出して、自分の手で配布するのが夢です。

◆あかし文を書きたく志す者として、大変助けになる時間を得たこと、「自分にも書ける」という思いが一段と強く与えられたことは、何よりの収穫であり、感謝でした。

◆先生方のお話をお聞きするにつれ、あまりにも傲慢な自分の姿に気づかされ、打ち砕かれ、まさに感謝の時でした。証しの文章、それは解説でなくシーンであると教えられ気づかされたことも、感激の何ものでもありません。重い扉を、強く強くたたかれたように思われました。

◆二回目の参加でしたが、今回もいろんな人たちのお話を聞かせていただき、よき学びのときでした。ホテルもお食事もよくて楽しい二日間でした。

◆祈り備えてきた夏期学校が無事に行われたことが大変うれしい。出席者が目標五十名を超えたことも、天候が台風七号を東へ追いやって晴天に恵まれたことも幸いだった。新しい方々が何名か顔を見せてくださったこともうれしい。これからはひたすら筆をとって私の証しを書くこと、これが私の使命である。

◆今まで夏期学校に十三回くらい参加してきましたが、今回は一番充実した夏期学校だったと思われます。今回どの講演も、よく準備され中身が深く、良い示唆が与えられました。皆で歌ったのも良かったです。

◆前日の大雨がスカッと晴れて大変良かった。一泊二日で、あっという間の時間で残念だった。遠路交通費を使って来るのだから、できれば二泊にしていただきたい。８グループの分団協議には２時間は欲しい。

◆伝えようとするテーマを見出すことができました。それは生きている「いのち」の喜びをありのままに証（語る、綴る）ことです。いままでは一方向からしかものごとを見ていなかったように思います。多方面から自分の思いを綴ることにしたいと思いました。

◆先生方の奥深いお話を伺って半端であることに気づきました。文章をたくさん書かないと深いものは書けない。もう少し努力しないといけない。良い学び交わりでした。

◆大田正紀先生の三浦光世氏に対しての思いを伺い、また三浦文学にスポットを当てられその本が出版されるのを楽しみにしています。

◆共にあって喜びの内に目も心も拓かれる思いを何度もしました。内に満ちてくる「書きたい・書くぞ」の思いに励まされて力いっぱい書いていきたいと思います。

◆もう少し時間がほしかったプログラムもありましたし、自由に話せる時間もほしかったと思いますが、一泊二日では、これ以上詰め込むのは無理だったと考えます。

◆設備は申し分なかった。台風一過のあともあり緑が多く、食事も含めてよかった。一泊二日の日程の中で、ともすれば次にずれ込みそうになるのを、幹事の方の努力で最小限に防がれた。ただ一言、部屋の収容人員がいっぱいで自分の席がなくなってしまった。

本部事務局便り

三浦喜代子

◎　夏期学校特集号をお届けします。今回は主催者側の多大なご努力によって５２名の多数の方々が参加しました。プログラムはよく練られ立てられていました。そのうえ、施設よし、お食事よしで最高の夏期学校でした。

　参加者の皆様から寄せられた感想は半分ほどしか掲載できませんでしたが、皆様が口を揃えて記しておられることは、どの講演もよかった・施設もお食事も環境も申し分なかった・参加者の学ぼうとする意欲が良い刺激になった等々です。特に関西ブロックの皆様への感謝の声が大でした。誠意ある準備に感動、久保田先生はじめ、お一人ひとりに深く感謝しますのことばがあふれていました。

　関西の皆様、ほんとうにありがとうございました。これからのブロック活動がますます祝されますようにお祈りします。

◎ＪＣＰあかし新書今年の主題は『志に生きる』です。原稿用紙３枚でお書き下さい。期限は十二月二十日まで。事務局までお送り下さい。なおメールで添付ファイルにして送って下さると助かります。詳しくは事務局まで。

◎本年度の年会費が未納になっておられる方々、よろしくお願いします。

◎あかし新書の発行について

　春の理事会において、次のあかし新書は、昨年の『生かされている喜び』と今年の『志に生きる』を合わせて一冊にし、二〇〇六年に発行することになりました。

　創設されましたＪＣＰ出版部において川上与志夫理事を中心に、進めてまいります。

◎昨年度のＪＣＰ本部会計は左記のようになります。夏期学校中の総会で報告、承認済みです。

◎新入会員紹介

☆　島本　耀子（関東）

編集後記

✿原稿をお待ちする間のドキドキ。いただいて紙面にふさわしく割付られるまでのドキドキ。　完成の感謝と喜びに満たされる編集員です。　西山純子

✿志を探す人から生きる人へと、先達から学びつつ今を生きたい。素敵な生き方をしている仲間との交わりに感謝。　槇　尚子

✿やっと秋が訪れるようです。机が恋しい季節になりました。「志に生きる」の力作をお待ちしています。　駒田　隆

✿パソコンができるというだけで編集委員の大役をおおせつかり、身が縮む思いをしています。皆様の足手まといにならないよう頑張ります。　山本披露武

✿夏期学校、充実の二日間を小さな紙面に収めきれないのが無念です。参加した方はご自身の記憶に重ねて、参加できなかった方は想像力でお読みください。　三浦喜代子